

## 佛地經に就て

西尾 京雄

## 一、本經の地位

佛地とは菩薩地に對する語であつて、菩薩十地の楷梯を歴て修行完成せる佛果圓滿の境界を現はすものである。阿毘達磨俱舍論、第二十七卷には如來に就て、因圓德(hetu-sampad)、果圓德(phala-s)、恩圓德(upāhāra-s)等の三種の圓德を擧げてゐるが、この中、果圓德に相當するものが佛地なのである。この果圓德について俱舍論に於ては、更に智(jāna)圓德、斷(prahāna)圓德、威勢(vīrabhava)圓德、色身(rūpakāya)圓德の四種に分つて説き、智圓德については無師智(amupadīśa-jāna)、一切智(sarvata-j)、一切種智(sarvathā-j)、無功用智(ayātana-j)の四智をあげてゐる。此等の小乗教の代表的なるものに相ひ對して大乘佛教の典型的なる佛果圓德を説いてゐると見らるゝものが佛地經なのである。小乗の部派佛教以來・新興の大乘佛教へと推移して來て何等かの發展をせねばならなかつた佛身・佛智の思想が、こゝに來りて飛躍的展開を見たのである。清淨法界及び大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智等の四智を詳説し、その理智不二を體會せる佛が、法性身・受用身・變化身の轉々する三重の身の思想を明説してゐる。

而して本經の總結としての四頌がそのまゝ、無着の大乘莊嚴經論・菩提品・第五一、五二、五三、五四、の四頌に連

引せらるゝを見るから、本經が佛果の四智、三身の思想の基となつたものであることが知られ、後來、大乘佛教の佛果圓徳を示すものとして普く用ひられるものであるから、本經の出現は佛教思想史上大なる地歩を占むるものといふことが出来る。

## 二、本經の科文

佛地經(三)

[I] 教起因緣分(序分)(四)

- 1、明住處圓滿
- 2、明佛徳圓滿
- 3、明聲聞徳圓滿
- 4、明菩薩徳圓滿

[II] 聖教所説分(正宗分)(八)

- 1、擧總五法
- 2、明別清淨法界(一〇)
- 1、明無差別相
- 2、明無雜染相
- 3、明非有行相
- 4、明非有爲相

佛地經に就て(西尾)

- 5、明<sub>二</sub>無增減相<sub>一</sub>
- 6、明<sub>二</sub>無行動相<sub>一</sub>
- 7、明<sub>二</sub>非斷常相<sub>一</sub>
- 8、明<sub>二</sub>無勞弊相<sub>一</sub>
- 9、明<sub>二</sub>非積聚相<sub>一</sub>
- 10、明<sub>二</sub>無我所相<sub>一</sub>

3、明<sub>二</sub>別大圓鏡智<sub>一</sub>(九)

- 1、明<sub>二</sub>調詞相<sub>一</sub>
- 2、明<sub>二</sub>無分別相<sub>一</sub>
- 3、明<sub>二</sub>障清淨相<sub>一</sub>
- 4、明<sub>二</sub>依止因緣生智影相<sub>一</sub>
- 5、明<sub>二</sub>無有我無攝受相<sub>一</sub>
- 6、明<sub>二</sub>不忘一切所知境相<sub>一</sub>
- 7、明<sub>二</sub>遍處恆時生智影相<sub>一</sub>
- 8、明<sub>二</sub>能生一切智根本相<sub>一</sub>
- 9、
- 10、
- 11、

明<sub>二</sub>於非法器不能生相<sub>一</sub>

4、明<sub>二</sub>別平等性智<sub>一</sub>(一〇)

- |   |  |
|---|--|
| 1、明 <sub>二</sub> 諸相・増上・喜愛平等性 <sub>一</sub> | 5、明 <sub>二</sub> 別妙觀察智 <sub>一</sub> (一〇) |
| 2、明 <sub>二</sub> 領受緣起平等性 <sub>一</sub>     |  |
| 3、明 <sub>二</sub> 離相無相平等性 <sub>一</sub>     |  |
| 4、明 <sub>二</sub> 弘濟大慈平等性 <sub>一</sub>     |  |
| 5、明 <sub>二</sub> 無待大悲平等性 <sub>一</sub>     |  |
| 6、明 <sub>二</sub> 色身示現平等性 <sub>一</sub>     |  |
| 7、明 <sub>二</sub> 敬愛所語平等性 <sub>一</sub>     |  |
| 8、明 <sub>二</sub> 世寂一味平等性 <sub>一</sub>     |  |
| 9、明 <sub>二</sub> 苦樂一味平等性 <sub>一</sub>     |  |
| 10、明 <sub>二</sub> 增殖功德平等性 <sub>一</sub>    |  |
| 1、明 <sub>二</sub> 建立因相 <sub>一</sub>        |  |
| 2、明 <sub>二</sub> 生起因相 <sub>一</sub>        |  |
| 3、明 <sub>二</sub> 觀喜因相 <sub>一</sub>        |  |
| 4、明 <sub>二</sub> 分別因相 <sub>一</sub>        |  |
| 5、明 <sub>二</sub> 受用因相 <sub>一</sub>        |  |
| 6、明 <sub>二</sub> 趣差別因相 <sub>一</sub>       |  |
| 7、明 <sub>二</sub> 界差別因相 <sub>一</sub>       |  |
| 8、明 <sub>二</sub> 雨大法雨因相 <sub>一</sub>      |  |

佛地經に就て(西尾)

9、明<sub>三</sub>降伏怨敵相<sub>一</sub>

10、明<sub>三</sub>斷一切疑因相<sub>一</sub>

6、明<sub>三</sub>別成所作智<sub>二</sub>(二〇)<sub>一</sub>

1、明<sub>レ</sub>現<sub>三</sub>身神通化<sub>一</sub>

2、明<sub>レ</sub>現<sub>三</sub>身受生化<sub>一</sub>

3、明<sub>レ</sub>現<sub>三</sub>身業果化<sub>一</sub>

4、明<sub>三</sub>慶慰語化<sub>一</sub>

5、明<sub>三</sub>方便語化<sub>一</sub>

6、明<sub>三</sub>辯揚語化<sub>一</sub>

7、明<sub>三</sub>決擇意化<sub>一</sub>

8、明<sub>三</sub>造作意化<sub>一</sub>

9、明<sub>三</sub>發起意化<sub>一</sub>

10、明<sub>三</sub>受領意化<sub>一</sub>

7、明<sub>三</sub>受用人喩<sub>二</sub>(五)<sub>一</sub>

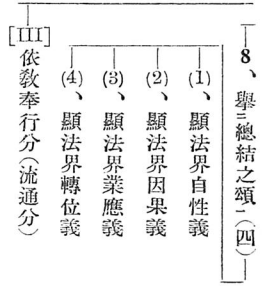
1、明<sub>三</sub>受用之人<sub>一</sub>

2、明<sub>三</sub>已入菩薩<sub>一</sub>

3、明<sub>三</sub>欲<sub>レ</sub>說<sub>三</sub>譬喩<sub>一</sub>

4、明<sub>三</sub>雜林譬喩<sub>一</sub>

5、明<sub>三</sub>大海譬喩<sub>一</sub>



### 三、佛地經の種々

佛地經の種々といつても、佛地經の諸譯が種々あるといふ意味ではない。諸論に引用せられてゐるものを指示して置くを目的として他日、佛地經の出来るだけ原型的なるものを決定しやうといふのである。かゝる試みは、當該經論が思想的地位に於て優越であればあるほど、その原型に近づかしてその原意を把握せんとすると同時に、その經句の相違變遷を觀取してその思想發展の跡を見究めやうとする方便からである。

第一、その完本としては、

(一) 佛說佛地經、一卷、玄奘譯(大・二六)

(11) *hphags-pa sañs-rgyas-kvi sa shes-bya-ba theg-pa chen-poli mdo* (the peking edition, hu 37b—47a)

等の二本のみであつて、漢譯佛地經の解釋としては、親光菩薩等の造である玄奘譯の佛地經論、七卷(大・二六)があり藏譯佛地經の解釋としては、戒賢著の佛地經論 *Buddha-bhūmi-vyākhyāna* (the peking edition, ch. 283b—333a)

佛地經に就て(西尾)

等がある。

而して、佛地經と佛地經論とは譯者は同一人の玄奘であるから、佛地經論に引かるゝものと佛地經とは何等經句の相違を發見することは出来ないが、藏譯に於ては兩者經句の相違が見出される。恐らく、譯者の相違であるであらうばかりでなく、兩者に左右があるのであらう。佛地經跋文に註疏(二七)と校合するといふ其は如何なるものなのであらうか。

第二に經の部分としては、本經の序分はそのまゝ、解深密經の序品と等同なのであるから、菩提流支譯、深密解脫經(大・一六)、玄奘譯、解深密經、並にその藏譯等がその校合に参照せられねばならない。又、序分・第一住處圓滿は即ち、十八圓滿の淨土なのであるから、攝大乘論中、引かるゝ菩薩藏百千契經のそれと同じものであるのであつて其等も参照せられるべきであらう。

次に本經正宗分、第八、總結之頌、四偈は波羅頗蜜多羅譯(A. D. 630—633)の大乘莊嚴經論(大・三二)の菩提品の中に連引せらるゝから、此によつて其と相應する梵文が見出さるゝことゝなる。

而して、この梵文を中心として、一方、無着自身の解釋を相承したであらう波羅頗蜜多羅の譯した大乘莊嚴經論は安慧の大乘莊嚴經論疏のそれと一致するものであつて、他方、玄奘の相承したその解釋と相對立してゐる二系統あることを知るのである。このことは他日論じやうと思ふ。

第三に、これは藏譯のみに關するものであるが、安慧の大乘莊嚴經論疏の菩提品の中に佛地經の經句が引用せられるが、其等は藏譯佛地經の譯者と異なる爲に譯相の相違せらるゝ部分々々の經句が發見せらるゝのである。

即ち、大圓鏡智を説く中、第二無分別相 (155 b. 3—5)、第三障清淨相 (155. a 7—155. b. 1)、第四依止因緣生智影相 (157. a 1—3)、第五無攝受相 (155 b. 8—157. a. 2)、第六所知境相 (153. b. 4—5)、第七遍處恒時生智影相 (155. a 4—5) 等に相應する個所に見出され、又、平等性智を説く中、第四弘濟大慈性 (157. b. 6)、第五無待大悲性 (157. b. 7)、第六色身示現性 (158. a. 1)、第八、世寂一味性 (157. b. 8) 等に於てそれぞれの經句が見出され、又、妙觀察智を説く中、第一建立因相 (158. b. 2—3)、第二庄起因相 (158. a 6—8)、第五受用因相 (158. b. 5—6)、第八雨大法雨因相 (158. b. 8—159. a 2)、第十斷一切疑因相 (158. a 4—5) 等に於て發見されて藏譯の他の一種類のものが髣髴し得らるゝやうになる。而して妙觀察智の第八相に引かるゝものは藏譯佛地經のそれよりも漢譯のそれに近いものであることは興味をおほゆるものである。

#### 四、本經と無着の大乘莊嚴經論、菩提品

本經と大乘莊嚴經論菩提品との關係については既に本誌、第十七卷、第二號に於て報じたるが如くであつて、實に密接なる關聯を有するものであり、殆んど一經の正宗分全體が依用、取意せられてゐることを知るのである。其等のことを論述することは重複となるから、こゝには省略することとする。

#### 五、西藏文、佛地經について

次項に於て和譯したものは、前號、掲載のものによつたのであるが、其は寺本婉雅教授將來になる大谷大學圖書館



所藏、北京赤字版を底本とし、同ナルタン版、並に龍谷大學圖書館所藏、デリゲ版の三本等を以て校合し校訂したものである。デリゲ版、閲覽に關しては西本願寺、翻譯課々員木村秀雄君の御幹旋にかゝるものであつて御好意を與へられたる同大學當事者、並に同君に對して深く感謝す。

尙、藏文印刷に當りて西藏文字使用について快語を與へられたる寺本婉雅教授、並に植字の全工程を擔當せる武田義雄君等に、に謝意を表する次第である。

## 六、藏文佛地經、和譯

印度語では *Ārya buddhahūmi nāma-mahāyāna sūtra*.

西藏語では *Hphags-pa sabs-rgyas-kyis shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo*.

### [I]

一切の佛と菩薩とを敬禮す。

1、是の如く我は聞く。一時、世尊は大無量宮殿——最勝に光曜せる七寶莊嚴は無量の世界に遍滿する大光明を放ち、各住居は善く分別して無量に建立し、周圍は際限なく、一切の三界より超過せる境にして〔三八、a〕出世間の其勝善根より生じ、善淨なる自在の表識の相にして、如來の住處、無量の菩薩衆は隨行し、無量なる天と龍と藥叉と乾闥婆と阿修羅と揭洛茶と緊捺洛と莫呼洛伽と帝釋と梵天と護世天と人と非人とが從行し、法味のなる喜と樂とによつて依持せられ、一切の衆生の一切の義利を成得せしめるために住し、煩惱の垢の一切の災横より離れ、一切の魔を遠離

し、一切の莊嚴より超えたる如來の加持の莊嚴にして、大なる念と慧と覺とによつて出離し、大なる止と觀との乘あり、解脫の大門は空と無相と無願とより入り、大寶蓮華王なる無量の功德聚によつて飾られたる莊嚴の依止處——に於て住し給ふた。

2、世尊は、善く達せる覺と相應し、二の現行無く、無相法に善く趣かしめ、佛住によつて住し、一切の佛と平等性を得、無障礙の覺に逮り、退轉せざる法を具有し、境によつて迷はされざるものにして、不可思議を成立し、三世の平等性に到達し、一切の世界に流入する身を具し、一切法に無疑の智を有し、一切の行と相應する覺を持し、法智に於て疑惑無く〔三八・b〕、分別すべからざる身體を有し、一切の菩薩によつて取得せらるゝ智にして、佛住は無二にして最勝の彼岸に達し、如來の間雜せざる解脫智の邊に到り、中と邊と無き佛地の平等性に達し、最勝法界を有し、虚空界の邊に到り未來際を窮むる方である。

3、彼の無量なる聲聞はすべて、又、調順なるもの、佛子にして、心は善く解脫し、慧は善く解脫し、戒は善く清淨で、法を求むるもの等と安樂に會し、多聞聞持し、聞を積聚し、善く思惟し善く語り善業を行ひ、捷慧・速慧・利慧・出離慧・決擇慧・大慧・廣慧・深慧・無等慧・智慧の寶を具有し、三明を具足し、現世に樂住の最上を得、大なる清淨福田にして、寂靜なる威儀を圓滿し、大なる忍辱と柔和とを具足し、如來の教に悟入せるものゝみである。

4、菩薩衆等は、種々なる佛國より集れる無量なる大菩薩衆にして、一切〔の菩薩〕は又、大處に悟入し大乘の法によつて出離し、一切の衆生に平等なる心あり、分別と分別すべからざるとの一切の分別を離れ、一切の魔・反駁者を〔三九・a〕摧き、聲聞と獨覺との一切の思惟より遠離し、大法味の喜と樂とに持せられ、五怖畏より超え、不退轉地に

一向と成れるものにして、一切衆生の一切の害を息むる地を現前するものゝみと俱會であつた。

〔II〕

1、爾の時、世尊は妙生菩薩に告げ給ふた。妙生よ、佛地は五法によつて攝せられる。五とは何ぞや。即ち、清淨法界と、如鏡智と、平等性智と、觀察智と、成所作智とである。

2、1、妙生よ、その中、清淨法界(dharma-dhatu-vicuddhi)は譬へば虚空(akasa)は種々なる色類(rūpagaṇa)の一切の種類に於て遍在(sarvagata)するも而も其(種々なる色類)によつても言說せられない、種々は無くして一味なるが如く、其の如く諸の如來の清淨法界も亦、種々なる所知「境」の一切種類に於て遍在するも而も其(種類)によつても言說せられない。種々は無くして一味である。

2、妙生よ、譬へば虚空は一切の色類に差別なく入る(abhinnaṇa)も色の諸過(tes-pa, dusta)に於ても染汚せられない如く、其の如く諸の如來の清淨法界も亦、一切衆生と平等の心性の眞實(yons-su-grub-pa, panini; panna)によつて差別なく入るも衆生の諸過によつても染汚せられない。

3、妙生よ、譬へば虚空は一切の身と語と意との業類の容受(go-byed)あるも虚空は勤(risol-ba, yadna)なく、又、作(amnon-par-tu-byed-pa, abhisaṅskara)〔三九・b〕もなきが如く、其の如く諸の如來の清淨法界も亦、一切の智と變化と衆生との所作成就の容受あるも清淨法界は又、勤無く作も無い。

4、妙生よ、譬へば虚空に於て種々なる色相(rūpākāra)の生(skye-ba, udaya)を現じ、又滅(hig-pa, vyaya)を現するも虚空は生無く、又滅も無きが如く、其の如く諸の如來の清淨法界に於ても亦、智と變化と一切の衆生の所作

成就の生は現じ、又滅を現するも清淨法界は生も無く滅も無い。

5、妙生よ、譬へば虚空に於ける多種の色相の増を現じ、又滅を現するも虚空は増もなく又、滅も無きが如く、其の如く諸の如來の清淨法界に於て如來の教なる醍醐(tathāgatanirdeśa-maṅḡḡa)は増を現じ、又(隱)没を現するも清淨法界は増もなく、又滅も無い。

6、妙生よ、譬へば虚空は無盡(huṣ-pa mod-pa, anīṣṭha)の故に虚空に於ける十方の中色類等は無量無邊なるも虚空は來と或は去と或は動と或は轉と無きが如く、其の如く諸の如來の清淨法界に於ける十方の中一切衆生に於て利益と安樂とを建立すること無量無邊なるも清淨法界は來と或は去と或は動と或は轉とは無い。

7、妙生よ、譬へば(四〇・a)虚空の中三千大千(世界)は壞を現じ、又成を現するも虚空は壞無く又成も無きが如く諸の如來の清淨法界に於てあらゆる相(の)現等覺と無量なる涅槃とを現するも清淨法界は正覺を現せず、又寂滅も無い。

8、妙生よ、譬へば虚空に依る色類に於て壞と爛と燒と燥と變異との種々相を現するも虚空は其等によつて變異なく、又勞弊もなきが如く、其の如く諸の如來の清淨法界に依る衆生界に於て學處と身と語と意との業の多種なる邪僞を成ずることあるも清淨法界は其等によつて變異もなく、勞弊も無い。

9、妙生よ、譬へば虚空に依りて大地は現じ、大山と火と光明(Snau-ta, āloka)と婆羅門眷屬(bya-r-gyu-ba, dvijacara)と日と月との眷屬も亦現するも虚空は其等の相にあらざるが如く、其の如く諸の如來の清淨法界に於て戒と定と慧と解脱と解脫智見蘊等を現するも清淨法界は其等の相では無い。

10、妙生よ、譬へば虚空に於て因と縁と展轉して (śhan tan śhan, parampara) 生起する無量なる三千大千世界の周輪等は現するも、そこに、虚空は動もなく作も亦無きが如く、其の如く諸の如來の清淨法界に於て一切種の圓滿せる無量なる佛の衆會(四〇・b)は現するも清淨法界は動無く作も亦無い。

3、1、妙生よ、如鏡智 (Adarśjana) は譬へば鏡の面に依つて像 (pratimā) 等が現するが如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面に依つて處と其の境に於て識の像等が現する。それ故に鏡の面とは平等によつて平等である。故にかく如鏡智は鏡の如きの智と知るべきである。其れ故に鏡の面はその譬と知るべきである。

2、妙生よ、譬へば或る福を樂ふ所有る大衆の來りつゝ近づくものが、各自の身體の失と徳とを觀察せんが爲に大圓鏡を勝處に動くことなく安することに於て失を除きつゝ徳を生ずるが如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面も亦、所有る無量無數の衆生等の雜染と清淨とを觀察せんが爲に間斷なきが故に動搖すること無く、清淨法界處に安住することに於て雜染を除き清淨を生ぜんが爲である。

3、妙生よ、譬へば鏡面が善く磨かれ、明・淨に於て無垢なれば一切に光 (ham-me, bhāṣate) (四一・a) 明 (hālō) 遍照する (hālō, vīcāte) が如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面なる佛智は煩惱と所知との障垢を離れ清淨である。又、その〔智〕の依止である定を攝持するが故に明・淨・無垢であり、一切衆生の所作成就の故に光・明・遍照である。

4、妙生よ、譬へば鏡面は本質 (śzgs) の縁を待つて種々なる像を生ずる相貌 (ṛṣu, nimitāva) あるが如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面は又、衆生の時の縁を待ちて智の諸像生ずる相貌がある。

5、譬へば鏡面に多種・種々・衆多種の像が現ずるも鏡面に其等〔像〕はあることなく、そこに、かの鏡面は動もなく又作もなきが如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面に多種・種々・衆多種の像は生ずるもその如鏡智の面には其等の智の像はあることなく、そこに、かの如鏡智の面は動もなく、又、作もない。

6、妙生よ、譬へば鏡面は其等の多種・種々・衆多の像と俱にもあらず又俱にもあらずして、其等と近接せざるとその因であるとの故であるが如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面は又、智の其等の多種・種々・衆多の像〔四一・b〕と俱にもあらず俱にもあらずして、其等と近接せざると妄失せざるとの故である。

7、妙生よ、譬へば鏡面の周邊〔全面〕の善く磨かれたるは前と邊と後とより遍く像の生起する因となるが如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面は斷絶せず而して無量の行相極淨であり、又、遍く智の諸像生ずる因となる。謂く、聲聞乘等は聲聞乘によつて出離せしめられ、獨覺乘等は獨覺乘によつて出離せしめられ、大乘等は大乘によつて出離せしめられるが故に聲聞乘智の諸像、獨覺乘智の諸像、大乘智の諸像の因となるのである。

8、妙生よ、譬へば鏡面に謂く、地、山、樹、舍、大宮殿の影像を現じ、大影像等も亦現ずるも鏡面はその量にあらざるが如く、其の如く諸の如來の如鏡智にも菩薩の初地より佛地に至る智慧の影像も亦現じ、世と出世との一切法の智慧の影像も亦現じて如鏡智はその分量ではない。

9、妙生よ、〔四二・a〕譬へば鏡面は他の本質〔*svabhava*〕によつて障礙の本質等に於て影像の生ずる因とならざるが如く、其の如く如來等の如鏡智も亦衆生の不善の友によつて攝せられる〔と〕不正法を聞くことによつて〔と〕の障礙等に於ては智慧の影像生ずる因とならず、器に非ざる〔*snod-mayin-pa, abhājanabhūta*〕が故である。

10、妙生よ、譬へば鏡面は本質が闇の中にあるもの等の影像を生ずる因とならざるが如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面も亦、衆生が過失によつて行ふことを樂ふ〔と〕無智の闇〔愚〕にあるもの等に智の影像が生ずる因とはならず器に非ざるが故である。

11、妙生よ、譬へば鏡面は遠隔の境等にある本質等の影像を生ずる因とならざるが如く、其の如く諸の如來の如鏡智の面も亦、衆生の正法匿しく不淨の業に住し、大信無きものに影像生ずる因とならず、器に非ざるが故である。

4、妙生よ、平等性智(Samata-jñāna)とは十種の圓成業と知るべきであつて、

1、相と増上と喜憂との平等性を證得する圓成業と、

2、緣起を領受する平等性を證得する圓成業と、

3、相を遠離し無相について平等性を證得する圓成業と、

4、弘濟(ṅōis-suskyōb-pa, pīṭāṇa)〔四・六〕相の大慈平等性を證得する圓成業と、

5、無待(yāi-bar-mi-īdor-ba, an-upekṣā)相の大悲平等性を證得する圓成業と、

6、一切の衆生の信解に隨つて色身を遍く示現する平等性を證得する圓成業と、

7、一切衆生によつて敬愛するべからざる語(gzun-bar-bos-pa'i tshig, aḍeyā-vākya)〔の〕平等性を證得する圓成業と、

8、世間と寂滅(nē-bar-shi-ba, upaśama)と一味平等性を證得する圓成業と、

9、世間法〔の〕樂と苦が一味平等性を證得する圓成業と、

10、功德を究竟して増殖する(cin-tu bskyed-pa, ātyarhan saṃvardhika) 平等性を證得する圓成業である。

5、1、妙生よ、妙觀察智(Pratyaveśān-jāna)とは譬へば世界は衆生界の依であるが如く、其の如く諸の如來の觀察智も亦、定と陀羅尼門と無礙解と辯と説と一切佛法との依である。

2、妙生よ、譬へば世界は衆生等の種々相の表識(ānā-pā-rī-jāvi-jāpī)を頓に生起するの因であるが如く、其の如く諸の如來の觀察智も亦、一切の所知(ceś-ya, jñeya)に於て無礙智(thogs-pa-med-paḥi ye-ces, apratigha-jāna)の種々相の表識を頓に轉生する因である。

3、妙生よ、譬へば世界は歡喜園と園林と池との可玩のもの、種々相によつて光・明・遍照するが如く、其の如く諸の如來の觀察智も亦、波羅蜜と菩提分法と力と(四三・a)無畏と不共佛法等の種々相の可玩のもの等によつて光・明・遍照である。

4、妙生よ、譬へば世界は即ち、洲渚と月と日と四天王種と三十三天と夜摩天と兜率天と樂變化天と他化自在天と梵天種等によつて善く分別せる相あるが如く、其の如く諸の如來の觀察智も亦即ち、世間と出世間との盛(phan-sum-tshogs-pa, saṃpatti)と衰(rgud-ja, vipattī)と、因と果あるものと、聲聞と獨覺と菩薩との圓證餘り無く觀察智によつて善く分別せる相がある。

5、妙生よ、譬へば世界は衆生等の大受用あるが如く、其の如く諸の如來の觀察智も亦一切種の佛の衆會の圓滿を示すことによつて法の大受用がある。

6、妙生よ、譬へば世界に五趣、「即ち」、地獄衆生と餓鬼と畜生と天と人との趣等を現するが如く、其の如く諸の如來の觀察智に於ても亦因と果ある差別の無邊の相を具する五趣等を顯現する。



7、妙生よ、譬へば世界に欲と色と無色界等を現するが如く、其の如く諸の如來の觀察智も亦因果ある〔四三・b〕無邊の差別相を具する三界等を顯現す。

8、妙生よ、譬へば世界に須彌山等の實の大山等が現するが如く、其の如く諸の如來の觀察智も亦佛と菩薩との威神と相應する廣大なる法教等を顯現す。

9、妙生よ、譬へば世界に於て甚深の傾動すべからざる大海等を現するが如く、其の如く諸の如來等の觀察智に於ても亦甚深の法界は一切の外道と異論者〔*pha-kyi ngol-ba, parapravādin*〕によつて傾動すべからざる法教等を顯現す。

10、妙生よ、譬へば世界は〔小〕鐵輪山と大鐵輪〔山〕等によつて圍繞せられてゐるが如く、其の如く諸の如來の觀察智も亦一切法の自相と共相との一切種に愚ならざる〔*kun-tu-rmongs-pa med-pa, asamūda*〕によつて圍繞されてゐる。

6、1、妙生よ、成所作智〔*kriyānūṣṭhāna-jāna*〕とは譬へば衆生等の身業は勤勵する、其によつて衆生等は農業と商業と王の役人等を趣求するが如く、其の如く諸の如來の成所作智は勤勵し、その身化業によつて諸の如來は衆生〔の〕一切の業と工巧處〔の〕傲・慢等を〔如來の〕業の工巧處の一切を示すのみにて摧伏して、又、かの方便善巧によつて衆生等の教の中に歸向せしめ〔*ḥḍan-par-byed, āvarjaka*〕、成熟せしめ〔*yoṅs-su-smin-par-byed, paripācānā*〕、解脱せしむるのである。

2、妙生よ、〔四四・a〕譬へば諸の衆生は身業を受用する、其によつて衆生等は色等〔の〕諸境を受用するが如く、其の如く諸の如來の成所作智は受用す、その身化の業によつて諸の如來は生處を異にして生れる衆生等に於て同類の生を示す、等同の種〔性〕を示すことによつても亦攝伏し、かの方便善巧によつても亦衆生等を教に入らしめ、成熟せし

め、解脱せしむるのである。

3、妙生よ、譬へば衆生等は身業を領受す、諸衆生は善作と惡作との諸業の果を各々領受するが如く、其の如く諸の如來は成所作智を受用す、かの身化業によつて諸の如來は本事と本生と一切の難行を受用し示現して諸の衆生を歸向せしめ、かの方便善巧によつて衆生等を教に入らしめ、成熟せしめ、解脱せしむるのである。

4、妙生よ、譬へば衆生の語業は慶慰す、それによつて衆生等は互に語り談じつゝ慶慰するが如く、其の如く諸の如來の成所作智は慶慰す、かの語化業によつて諸の如來の善義、善文を唯聞くのみ(四四・b)でも亦、小智の衆生を信ぜしむる法説に入れつゝ、その方便善巧によつても亦、衆生等を入らしめ、成熟せしめ、解脱せしむるのである。

5、妙生よ、譬へば諸の衆生は語業を修習す。それによつて諸の衆生は互に所作を修習し、過失をそしり、過失無きを讚しつゝ召命するが如く、其の如く諸の如來の成所作智は修習す、この語化業によつて諸の如來は正學處を建立し不放逸を讚じつゝ隨信行と隨法行等の諸人を建立する。この方便善巧によつても亦諸の衆生を教に入れ、成熟せしめ解脱せしむるのである。

6、妙生よ、譬へば諸の衆生は語業を辨揚す、此によつて衆生等は互に不了義を知らしめ、歌頌と諸論等をも亦誦するが如く、其の如く諸の如來の成所作智は辨揚す、此の語化業によつて諸の如來は諸の無量の衆生の疑の無量種等を斷じつゝ、この方便善巧によつても亦衆生等を教に入れしめ、成熟せしめ、解脱せしむるのである。

7、妙生よ、譬へば諸の衆生の意業は決擇す、此によつて衆生等は爲すべからざるもの等を決意するが如く、其の如く諸の如來(四五・a)の成所作智は決擇す、此の意化業によつて諸の如來は衆生等の八萬四千の心行等を決意しつゝ、

616  
此の方便善巧によつても亦諸の衆生を教に入らしめ、成熟せしめ、解脱せしむるのである。

8、妙生よ、譬へば諸の衆生の意業は造作をなす、此によつて衆生等は思惟して所起の業を造作するが如く、其の如く諸の如來の成所作智は造作をなす、又、此の〔意〕化業によつて諸の如來は衆生の其等の行の現行 (kram-tse-spyod-pa, samudācāra) と不現行、徳と失等を觀じて其を捨つると生起するとの爲に諸の對治を造作しつゝ、その方便善巧によつても亦諸の衆生を教に入れしめ、成熟せしめ、解脱せしむるのである。

9、妙生よ、譬へば諸の衆生は意業を發起す、それによつて諸の衆生は業を發起するが如く、其の如く諸の如來の成所作智は發起す、その意化業によつて諸の如來はその對治の法を宣説の爲に名身と句身と字身等を説きつゝ、此の方便善巧によつても亦、衆生等を教に入れしめ、成熟せしめ、解脱せしむるのである。

10、妙生よ、譬へば諸の衆生は意業を領受す、それによつて衆生(四五・b)等は樂と苦とを各々領受するが如く、其の如く諸の如來の成所作智は領受す、此の意化業によつて諸の如來は一向と分別と反問と置答とに於て回答すること (lan-gdab-pa, prativāhana) 等に應ずるが如く回答すべき爲に過去と未來と現在の諸義を領受するのである。

7、1、爾の時、妙生菩薩は世尊にかくの如く尋ね給ふた、

世尊よ、清淨法界に於て智の受 (rdzogs-par-joms-spyod-pa, sambhoga) 用 (dgos-pa, prayojana) と一味 (eka-rasa) と和 (lādes-pa, miśra) と合 (re-par-lādes-pa, upamiśra) とあり、諸の如來のみありや、然も諸の菩薩にもありや。

世尊は告げ給ふた。妙生よ、智の受・用・一味・和・合は諸の菩薩にも亦あると見るべきである。

2、〔妙生菩薩は復、世尊に〕尋ね給ふた。智の受・用・一味・和・合は如何なる菩薩にありと觀るべきであらうか。

〔佛は妙生に〕告げ給ふた。無生法忍を得たる諸菩薩である。無生法忍を得たる彼等は二想(*grī-sū lū-ces-pa*)の對治に於て平等心性を得て、かくの如く自と他との想を對治する。彼等は其より已上は自と他との想を生起せずして智の受・用・一味・和・合である。

3、〔妙生菩薩、は復、佛に〕尋ね給ふた。世尊よ、惟願くば此等の菩薩は世尊の所説の義を求めてゐるので諸菩薩〔四六・a〕に廣く宣説する譬喩をなしたまはんことを。

4、世尊は告げ給ふた。妙生よ、譬へば三十三天等は雜林(*śres-paḥi tshai, mīrakavana*)に入らざるかぎり彼等の天の諸受用の事物と領受とは我所執の門より和・合に住しないけれども、雜林に入るかぎり、その時に雜林のかくの如き威力で三十三天のそこに入れるものゝ天の諸受用の事物と領受とは我所執無く和・合に住するが如く、其の如く諸の菩薩は無生法忍を得られざるかぎり、一切の聲聞と獨覺とに無く、かの心平等を得てかの捨を得ること無く二想ありて、彼等は智の受・用・一味・和・合に住しないが、無生法忍を得るかぎり、其より已上は二想の對治によつて平等心を得、其より一切の聲聞と獨覺とに不共なる捨(*thun-moh-ma-yin-paḥi brān-s'ams, asāharāna-ṅpeka*)を得る。其より彼等の智の受・用・一味・和・合に住するのである。

5、妙生よ、譬へば衆くの大河・小河等が大海に入らざるかぎり、各別の所依(*gnas thadad-pa, bhinnāstraya*)と、各別の水(*chu thadod-pa, bhinnajala*)と小水と増減ある水と各自の所作成就(*bya-da sgrub-pa, kiḥya-anuśihāna*)の業ある水と水より生れたる有命者(*srog-chags, prāṇaka*)水獸(*brul-tu*)〔四六・b〕等の生命を現はす所依である。大海に入れるかぎり、その時各別の所依無きと各別の水無きと無量の水と所作成就の一の業ある水と水より生れたる廣大なる有

618

命者等の生命を現はす所依なるが如く、其の如く諸の菩薩が諸の如來の清淨法界の大海に入らざるかぎり、各別の所依と各別の智と小智と増減ある智と各自の成就の業ある智と小分の衆生(sensāraṇa, paritassava)等を成熟する善根の所依である。諸の如來の清淨法界の大海に入れるかぎり、その時各別の所依なきと各別の智無きと無量の智と増減無き智と智の受・用・一味・和・合がありて、無量の衆生等を成熟する善根の所依である。

8、其より、世尊はこの時此等の偈を説き給ふた。

(1) 一切諸法の眞如は

二障清淨の相なり、

事智、彼の所縁

自在、無盡の相なり。

(2) 眞如智は普く

修習より圓證するなり、

一切衆生に二を生じ

一切種に無盡果あり。

(3) 身と語と心との變化の

加行の方便の業〔四七・a〕あり、

定と陀羅尼との門と

無量の二と相應するなり。

(4) 自性法・受用と

變化とによつて差別轉ずるものなり、

諸佛のこの法界

清淨は説かれたり。

〔III〕

世尊がかくの如く説かれし時、妙生菩薩と彼等菩薩と彼等菩薩と一切の會衆と天と人と阿修羅と乾闥婆との世界は歡喜し、世尊の説き給へるを讚嘆した。

聖佛地大乘經、終る。

印度親教師 Jhanitra と Cīlendrabodhi と Prajñāvarma と大校修譯官尊者 ye-ces-sde とが註疏(ika) と校合して譯・閲・刊定した。